新聞　2016.9.3 毎日新聞 埼玉版 朝刊　〔第3種郵便物認可〕

県庁に「店」20年目

成長もたらす居場所 存続願う

障害のないあなたへ
知事応接室を「占拠」した人々
4

知事応接室の「占拠」が起きた1988年から続く「総合県交渉」によって、実現したこともある。その一つが1997年、県庁第2庁舎の1階に障害者団体のアンテナショップ「かっぽ」がオープンしたことだ。「スタッフの障害者は気後れすることなく、庁内を堂々と歩けばよい」。そんな意味を込めて名付けられた。

スタッフは、複数の障害者団体が日替わりで派遣する障害者が務める。お茶などの飲料や弁当、県内各地の名産品を取り扱い、庁内の各課に配達もしている。

店舗は、県庁の玄関口という恵まれた位置にあるが、その運営は「世間の風」と無縁ではない。オープンから11年後には1階下のフロアにコンビニエンスストアが開店したことで、売り上げが激減。当初は障害者らが台車に商品を乗せ、「いかがですかー」と庁舎内を巡り歩いていたが、職員から「会議中なのにうるさい」と苦情を寄せられ、廊下などでの定点販売に切り替えた。ここ数年は赤字が続き、存続に向けて寄付を募ろうと検討している。

今年は開店から20年目。店には当初、主に障害者が施設や作業所でつくったパンやクッキーなどの「授産品」を置いていたが、各団体が地元で販路を開拓したため、現在はお茶などの飲料が売り上げの中心となっている。

それでも、福祉団体の職員をしながら7年前から専従の店番を務める板倉真紀さん(36)＝越谷市＝は、「かっぽ」が存続する意義を感じている。さまざまな障害がありながらも、仕事を通じて変わってゆくスタッフの姿を見てきたからだという。

例えば、ある発達障害の男性の場合、知り合った10年ほど前は、あいさつしても反応してもらえなかった。店舗に一緒にいると、不意に髪の毛を引っ張られることもあった。だが、板倉さんが休みを取っていた日の日誌には、自分に見せたことのない姿が記されていることがあった。

「ぶんちゃかぶんちゃか言いながら、ジュースを飲んでいた」「ソファで昼寝して一日が終わった」。普通なら「不真面目」で片付けられてしまうことだが、板倉さんは「人間味あふれる人柄」に興味をそそられた。

周囲との関わりによって、男性も徐々に率先して準備や片付けをするようになった。そして、帰りには「さようなら」とあいさつするようになった。

スタッフの魅力にひかれるのは、板倉さんだけではない。店を訪れる県職員もしばしば「久しぶり」「今日は張り切ってるね」などと話しかけてくれる。板倉さんは「自由気ままに、時にはぐっすり昼寝してしまうような姿が県庁の風景の一部となり、いつしか周りの人を和ませていた」と話す。

「すぐに仕事を覚えて『かっぽ』から巣立ち、社会に出て行く人もいるけれど、長年かけて変わっていく人もいる。それは生産性や効率性が重視される組織の中では、そもそも認められていないこと。でも、そこに大切なことがあるような気がする」。板倉さんは、「かっぽ」の存続を切に願っている。【奥山はるな】

＝つづく

障害者団体のアンテナショップ「かっぽ」の店番をする板倉真紀さん（中央）＝さいたま市浦和区の県庁で

東京理科大跡地 教育拠点

久喜市が意見公

久喜市は、東京理科大・久喜キャンパスの跡地を総合的な教育拠点として活用する方針を固めた。広く市民の声を聞くため、12日から10月11日までパブリックコメント（意見公募）を実施する。

同大・久喜キャンパスは、1993年3月に開校。同市は土地取得や校舎建設の費用として30億円を補助し、周辺整備費として10億を支出した。

しかし2011年に移転計画が浮上。市は存続を求めたが、同大は「受験者数の減少など経営上の問題」を理由に、15年度末で神楽坂キャンパス（東京都新宿区）に移転した。

同市の今は、同大かた跡地約5平方㍍のう000平方㍍センターを新1万200全小中34校徒に提供す

また、同校舎7棟のは解体し駐▽B棟には館と子育てを置く▽民ラウンジル、視聴覚備する▽D委員会をには子ども備する▽ギャラリールを設は

地元の白目米からつくられた深い旨味の淡麗辛口純米酒
創業天保11年 歴史と伝統の蔵元
石井酒造株式会社

秩父の長座布

1日午前ろ、秩父市カリ商事」造工場内で、ると、従業